

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02253

研究課題名（和文）舞台美術から見た日本のオペラ文化史的考察

研究課題名（英文）A Historical Study of Opera Culture in Japan from the Perspective of Stage Art

研究代表者

牧野 良三（MAKINO, Ryozo）

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：80120872

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の起点となる戦後日本のオペラ上演に関するデータ分析では、オペラという外来文化が、いかにして日本の文化風土に移入されたか、という実態を明らかにするものであるが、その際行った分析結果の視覚化によって、日本のオペラ受容の形を裏付ける十分な視覚資料が得られた。これに加え、戦後日本のオペラ美術を牽引した一人である三林亮太郎氏の作品を軸に、データ分析で収集した資料を時系列に对照させ、舞台美術から見たオペラ受容の変遷を俯瞰する視覚資料の作成と考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オペラ上演記録の分析とそれに伴う可視化の結果、今まで見えにくかったオペラ文化の移入の実態と外来文化に対する日本特有の文化風土の特徴を明らかにしたことで、戦後の日本のオペラ文化史的な研究に寄与する視覚資料となることが期待される。この分析作業を起点にした劇（物語）構造及び劇空間の分析と考察では、舞台美術という造形的側面からオペラ受容の実態が明らかになり、受容の変遷が概観できる視覚資料として舞台美術から見たオペラ研究の第一歩となり、我が国の先行するオペラ研究（音楽的、演出的研究）と相まって、より総合的なオペラ研究が可能となった。

研究成果の概要（英文）：Through a data analysis of post-war opera performances in Japan, which constitutes the starting point of this study, we clarify the actual conditions of how the foreign opera culture was introduced in the cultural climate of Japan. By observing the results of the analysis conducted, we were able to obtain sufficient visual resources to substantiate a description of the acceptance of opera in Japan. Moreover, we compared the material collected through data analysis in chronological order, with the works of Mr Ryotaro Mitsubayashi, one of the leading artists of opera art in post-war Japan. We thereby created and examined visual materials that provide an overview of changes in the acceptance of opera from the perspective of stage art.

研究分野：舞台美術

キーワード：舞台美術から見たオペラの変遷 オペラの劇構造 オペラの空間構造

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

オペラの本格的な上演は昭和期に入ってからのことになるが、当初はオペラを音楽的視点から捉えたものが多く、総合芸術として視覚的、造形的な側面をも含めた包括的なオペラ上演は少なかった。これは上演環境(劇場)という物理的な不備が大きな要因として考えられるが、それにもまして当時のオペラ上演に対する姿勢は、先進文化としての西洋音楽の吸収であったこともあり、上演時の視覚的表現に関しては二次的に扱われることが多かった。日本におけるオペラの移入は、総合芸術としてのオペラという捉え方ではなく、音楽領域を主体とした捉え方が主流であった。このような経緯から、日本のオペラ研究は上演記録の整理とオペラ芸術の音楽性についての論評、及び演出的な解説が主体となっている。

2. 研究の目的

本研究はオペラという外来文化(芸術)が日本で受容される過程を、舞台芸術の構成要素である舞台美術の視点で捉え、造形的、空間的な側面から解明するものである。日本にオペラが移入されてから100年余となるが、上演資料の多くは音楽的解説と演出的論評が大半を占め、空間的な受け皿である舞台美術の資料は断片的に散見するにとどまっている。ここでは、オペラという外来文化(芸術)の受容の在り方を造形面から明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

日本のオペラの本格的な公演の担い手である二つのオペラ団体の公演活動に加えて、1990年代から公演回数が急増する海外の各劇場の引越し公演、1997年に開場する新国立劇場のレパートリー、その他、精力的に公演を行っている日本の各劇場の公演実態を手掛かりに上演記録を作成し、それを起点に本研究の目的である「日本におけるオペラ文化の受容」の解明に向けて作業を進める。

(1) 戦後65年間(1951年～2015年)のオペラの上演記録を分析し、外来文化に対する日本特有の文化風土について考察する。また、上演記録を図表等で視覚化することで、今まで見えにくかった外来文化(オペラ芸術)の移入の実態を明らかにする。

(2) 上演記録の分析を基に公演回数の多い上位10作品をサンプルとして、オペラの演劇的側面である劇構造について、劇進行と登場人物との関係を示す視覚資料を作成し、考察を加える。同時に、上演記録の作成の際に収集した上演写真を時系列に対照させ、劇空間の変遷が俯瞰できる視覚資料を作成し、考察をする。

4. 研究成果

(1) 上演記録の分析から

公演回数の年代別推移及び上演された演目とその公演回数の年代別推移の分析。

上演記録から算出した65年間(1951年～2015年)の公演回数

公演回数 1,628回 上位20位まで 797回 その他 831回

順位	'51~'55	'56~'60	'61~'65	'66~'70	'71~'75	'76~'80	'81~'85	'86~'90	'91~'95	'96~'00	'01~'05	'06~'10	'11~'15	計
1~10位	20	26	17	21	24	32	29	42	54	73	88	93	58	577
12~20位	5	4	4	7	10	11	19	20	16	33	30	32	29	220
その他	16	13	28	35	40	42	43	55	82	96	155	130	96	831
合計	41	43	49	63	74	85	91	117	152	202	273	255	183	1628

上演記録から算出した65年間(1951年～2015年)の演目数

演目数 318演目 上位20位まで 21演目 その他 297演目

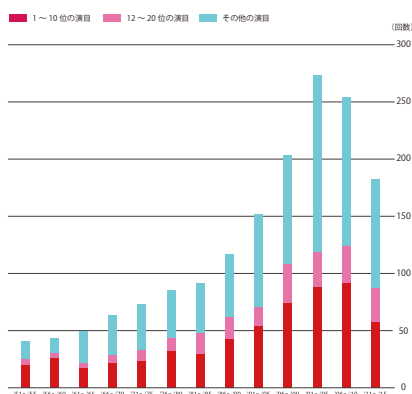
- ・ データ分析の初期の年代では5年間で約40回の公演回数が、1986年代を境に伸び率が大きくなり、ピーク時の2001年代は270回を超える公演回数を示した。
- ・ 各年代とも上位20位までの演目が常に公演回数全体の約半数を占めているが、戦後65年間の演目数の合計は318を数える多さである。

公演回数の算出は日本人のオペラへの関心が反映されるが、戦後65年間で、バブル崩壊、リーマンショック等の社会的、経済的状況とオペラの公演回数を照らし合わせると、公演回数自体には影響を感じさせない。それは、オペラを含むクラシック音楽の支持層が下支えをしていることが要因と思われる。

反面、1986年代以降の25年間は、年代ごとの公演回数に占める海外歌劇場の引越し公演が公演数の約半数を占めている。その要因は、本来のオペラの公演活動を促す力とは違う要素が考えられる。

年代ごとの公演回数の推移

上位 20 位までの演目とその他の演目の年代 (5 年) ごとの公演回数の移り変わり

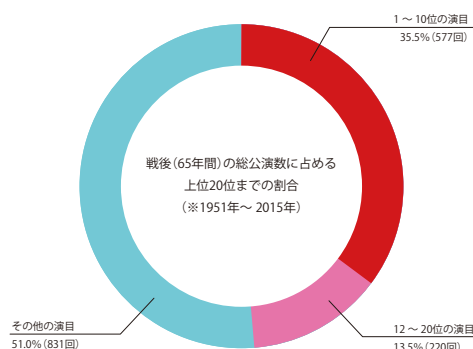


20 位までの演目と公演回数

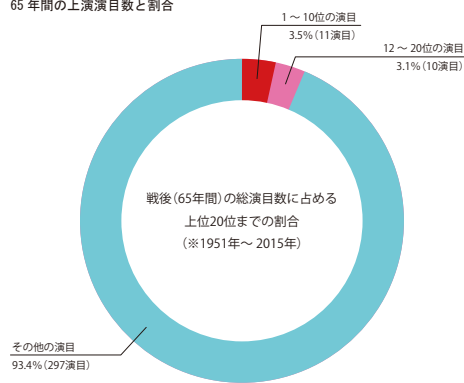
上位 20 位までの演目の 65 年間 (1951 年～2015 年) の公演回数

順位	作品	計
1	フィガロの結婚	76
2	椿姫	70
3	魔笛	64
4	カルメン	62
5	蝶々夫人	58
6	ドン・ジョヴァンニ	52
7	こもり	45
8	トスカ	40
9	ラ・ボエーム	38
10	セビリアの理髪師	36
	コシ・ファン・トゥッテ	36
12	メリー・ウィドウ	31
13	リゴレット	29
14	アイーダ	26
15	トゥーランドット	24
16	カヴァレリア・ルスティカーナ	20
	愛の妙薬	19
18	夕霧	19
19	ランメルモールのルチア	18
	造化師	17
20	ヘンゼルとグレーテル	17

65 年間の公演回数と割合



65 年間の上演演目数と割合



オペラ移入期から今日まで、演目数は約 318 演目と算定された。伊、仏、独、露、etc…、言語も多様で演目も多様、これらの演目が一堂に集まるのは日本だけだと思われる。オペラの見本市みたいに受け入れて何をしようとしたのか、これはヨーロッパの社会 (文化) 風土ではあり得ないのではないかと。多様性と言ってもいいが、焦点なきオペラ公演 (受容) と言えなくもない。

(2) 劇構造と劇空間の考察

① 劇構造の考察

オペラを、物語を表す音楽と捉えるなら、ドラマのストーリーがオペラを理解する一つの要素となり得る。それを視覚的存在とする媒体が、舞台美術の役割であった。従って、造形の抛り所はやはり物語、時代背景、登場人物の構成等であるということに辿り着く。登場人物たちがうごめくための物理的な土台 (受け皿)、もしくは、ドラマが成立する視覚環境を創出する側からオペラを見ることが出来る。

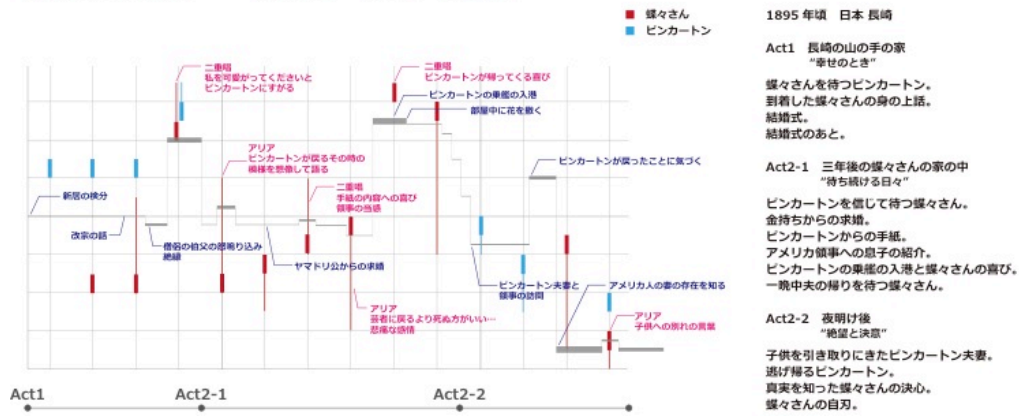
音楽の役割は登場人物の感情をありのままに描き出すことが中心となるが、舞台空間の構成は、物語のための空間 (環境) をいかにして造るかが基本となる。

上演芸術であるオペラは、観る我々にとってどのように作用するか。それは、上演時に同じ時間と空間を共有することで得られる緊張感を持った音楽的な体感と同時に、物語のテーマに自身を重ね合わせることで起こる感動体験である。これは、オペラという芸術自体があらゆる知覚に作用するので、瞬時にイメージとして映像化され、我々を時間と空間を共有する物語の世界にいざない、物語の世界に浸ることを可能にするからである。音楽が表す登場人物たちの心理的な心のひだの振幅と、舞台上に創出された物語の世界観を示す舞台美術の効果はその手掛かりとなる。

劇構造の分析とは、オペラの物語性を考察することであり、物語に流れる時間の空間的な展開を図式化したものとして捉えることが出来る。ここでは、公演回数の上位 10 作品の物語の展開を、場面展開と主要人物の交錯、アリアなどで表される主要人物たちの心理的な振幅を軸に図式化してみる。

その結果、作品別に劇進行による物語の展開及び、登場人物の心の振幅などを複合的に解析すると、物語の基本的な構造が浮かび上がってくる。

劇（物語）構造の考察 「蝶々夫人」 上演回数 5位（58回）



「蝶々夫人」は欧米から見た19世紀の日本のイメージが、東洋と西洋の文化的対比として表れたエキゾチックな作品である。ただ、日本人にとってはジャポニズムの概念のようなイメージギャップを伴って受け入れられてきた。物語の解釈も二極に分かれ、日本女性の純愛とするか、時代の変化の中の歴史的エピソードとするかによって、劇空間の表現が異なるものとなる。従って、外国人の演出、主演と日本人による演出、主演によって次のように受容が変わる。

- ・ 西欧から見た日本のイメージのエスニックな物語
- ・ 国籍の異なる男女の悲劇的な愛の物語
- ・ 日本様式の近代的な表象の世界（西欧的形象化）

② 劇空間の考察

舞台美術は音楽より、場面設定、時代背景、物語が繰り広げられるにふさわしい環境の創造が表現の主体となるので、オペラ受容の初期には、基準とする舞台の選定が必要となった。

日本に移入されたクラシック、オペラの作品の多くは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて発表されたものである。いわゆるバロック音楽やロマン主義（派）の音楽が主流であり、ほとんどがバロック様式の額縁式劇場（舞台）で上演されたものである。従って、舞台の構成には一定の様式性があり、作品毎に定形的な構造が見られる。それが、日本に移入されたオペラの舞台のイメージを形成した形跡が窺える。例えて言えば、歌舞伎劇の定式舞台にも通ずる定形的様式の定着とも言える。

1950年代以前の日本では、オペラの舞台上演は、西欧の形式を再現することから受容し始めた。オペラを視覚的に受容した手法は、つまり、「写し」から始まる日本芸能の習得技法の延長とも言える。1940年代～1950年代の舞台上演は、オペラの演出も舞台美術も引き写しと捉える面もあるが、先に触れた歌舞伎劇の定式舞台の概念から捉えると、様式の移入としてやむをえない処置でもあったと言える。その結果移入100年を超えて尚、海外からの引越し公演が、日本のオペラ公演に強い影響を与えている。そこで、日本の舞台美術家が受け止めたオペラの造形的受容を考える一つの手掛かりとして、三林亮太郎氏の事例を辿ってみたい。

三林作品について言えば、蝶々夫人の戦前の作例はない。戦後は外国の視点で見たエキゾチシズムの表象を試みた。その後、西欧的な機能性を持った日本様式の舞台構成、抽象化した日本の様式による表象的舞台などを試みている。

劇空間の考察 「蝶々夫人」 上演回数 5位（58回）

三林亮太郎作品

1961 藤原歌劇団



1966 藤原歌劇団



1973 読売新聞社



1961 1966 1973 1977 1988 1998 2005



1977 二期会



1988 藤原歌劇団



1998 新国立劇場



2005 新国立劇場

日本のオペラ美術の多くは音楽劇としての物語背景を主体として、劇的イメージ、物語イメージを視覚化したものが多い。だから未だに新国立劇場のオペラの舞台は具象的イメージのバリエーションが多いのだと思う。それが日本人のオペラ受容の一つの形として残っている。

三林作品は、オペラを受容した近代日本の舞台美術の標本の一つとして捉えてみると、西欧オペラの単なる模倣というより、当時の日本のオペラの受け止め方や舞台美術の技法、様式の独自の解釈も含まれている。その当時の音楽、美術、文芸の在り方が色濃く反映され、時代の流れを象徴する側面もある。従って、オペラの視覚的受容は、簡単に言えば日本の舞台美術が（歌舞伎、能しか知らない日本演劇が）どのようにオペラという外来文化を受け入れてきたかという視点に他ならない。藤原歌劇団、二期会、あるいは三林作品を通して考えてみると、戦後様々な海外の歌劇場が招聘されたが、それは各々の国の文化が受け入れた劇空間を見せてくれたデータとも読み取れるであろう。

(3) オペラと社会的変容

海外のオペラ公演も、大胆で新しい演出を試みる傾向がみえる。それらの情報は、いち早く音楽評論などで紹介されたり、賛否両論が交わされたりしているが、日本で上演されるオペラはまだ、正統的な装飾的具象舞台が多い。それでも、イタリアの自然主義的舞台、ドイツの象徴的演出の舞台を両極として、新リアリズムとか心理表現の重視とか、現代的解釈による役柄の表現とか多様な展開をみせている。

1989年のドイツ統一、EUの拡大など、1990年代以降は、政治的、社会的関わりを重視した舞台（演出）が話題となる。特に、急東ドイツ出身の演出家たちが、「タンホイザー」や「魔笛」「ニーベルングの指輪」「トリスタンとイゾルデ」などで、独自の作品解釈を示した。フランスのシエローなども独自の演出傾向を示した。イタリア系のストレーレルやロンコーニは、古典劇の前衛的演出で評判となる。

日本では、1991年のバブル崩壊と、1995年、阪神淡路大震災が社会経済や消費構造を変える契機となった。イタリア、ドイツ、アメリカのオペラ団の他に、ロシア（旧ソ連）、東欧など、多様な地域から多様な演出のオペラを招来することになる。オペラのグローバル化とも言える公演体制が形成されていく。

2001年のニューヨークの同時多発テロと、その後の2008年のリーマンショックも社会情勢、経済状況を大きく変革させたと言える。経済的、集客的視点から、音楽祭、フェスティバルが増え、新国立劇場の他、東京、横浜、びわ湖、北九州など、地方公演、音楽祭も盛んになってきている。

2011年の東日本大震災による原子力発電や津波に対する環境変化への社会の対応も、首都圏中心のオペラ公演の動向に変化をもたらしている。

作品解釈の多様性と演出の新しさが求められ、芸術的側面より娯楽、大衆化の側面が求められるようになった。

- * データ作成にあたっては、日本オペラ史（関根礼子著）、昭和音楽大学オペラ研究所オペラ情報センター、日本オペラ振興会ホームページ、東京二期会ホームページ、新国立劇場ホームページ、二期会史、音楽の友、GRAND OPERA、を基に収集した。
- * データ分析にあたっては、戦後日本のオペラ界を牽引してきた藤原歌劇団、東京二期会、新国立劇場、その他主要公演団体、海外歌劇場日本公演の1951年から2015年までの65年間の活動をサンプルとした。
- * 劇構造、劇空間の考察にあたっては、上位10作品を用意したが、本報告書の紙面の都合上、蝶々夫人を例としてあげる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小石 新八 (KOISHI Shinpachi)		
研究協力者	愛甲 佳世 (AIKO Kayo)		